

【1：サキュバス】

最たる脅威に指定された大陸中央の塔。今まで送り込まれた並の性戦士は全て振り返りにあって、誰一人帰還してこなかった。魔術師の調査では非常に危険なダンジョンという話だったから、レイヴンは気を引き締めて塔の内部へと踏み込んでいった。

レイヴンはベテランの性戦士で、過去に数々の淫魔の巣窟を潰してきた精鋭であった。ありとあらゆる誘惑と快楽に耐えて生き延びてきた淫魔退治のエキスパートだ。

「あら、今度の性戦士さんは手ごたえがありそうじゃない」

探索を進めるレイヴンが最初に対峙したのは、何度も倒したことのある下級のサキュバスだった。

「こんにちは。搾り取られにきたんですか？」

サキュバスはレイヴンの姿を見てクスクスと笑った。レイヴンは慎重に距離を詰めたが、接近しても感じられる魔力の量はやはり下級のそれで、あまり強そうな感じを受けなかった。

肉厚の唇に塗られた赤い口紅がキラキラと輝いていた。それは他ではあまり見られない特徴で多少気にはなったが、特に問題はないだろうと思って正面から向かい合い全身を愛撫していった。

「あんっ……」

レイヴンが愛撫を始めるとサキュバスはすぐに吐息を漏らして感じ始めた。乳房や陰部を責め立てると反応がよろしく、身体を震わせて恍惚の表情を浮かべた。レイヴンは愛撫にたしかな手ごたえを感じ、こいつは楽勝だなと思った。

「んっ……」

サキュバスは負けじとレイヴンの唇に吸いつき反撃をしてきた。肉厚の唇がレイヴンの唇と合わさると、いきなり魂が吸い取られそうな恍惚感に襲われてしまった。

「ちゅっ……、ちゅっ……」

その肉厚の唇はあまりにも魅力的だった。自らの気分が盛り上がってないにも関わらずに発生したその恍惚感はいかに唐突で、油断していたレイヴンは思わずほうけてしまった。

「私のお口、とっても素敵でしょ……、ちゅっ……」

サキュバスはその様子を見て唇を重ねながらもクスクスと笑った。サキュバスの舌がレイヴンの唇をなぞり、口内に侵入し歯茎を舐め回す。その嗜虐的な笑いと這い回る舌の感

触に翻弄され、レイヴンは動きを止めてしまった。

「はむっ」

次にサキュバスは口を開くとレイヴンの下唇をハムハムと挟み込んできた。ねっとりとした動作で唇の粘膜を押しつけ、擦り合わせて愛撫してきた。

レイヴンはしばしの間そのキスを甘受してしまったが、口の中に舌を入れられて、にゅるんと舌同士が触れあう感触がすると、その異質さに正気に戻った。

下級の淫魔だと侮っていたが、そのキスはとても上手く意外にも防戦になってしまった。さて、このままキスで勝負を続けるか、それとも一回仕切り直して別の責めをするか。

《選択肢》

【1 A：負けじと舌を突き出す】

【1 B：体を離して仕切り直す】